

東日本大震災の翌年4月、東北大学の大学院文学研究科に「実践宗教学寄附講座」が開設された。これは厳密には寄附を受けて大学が開設しているものであって、「心の相談室」の活動そのものというわけではない。しかし、その設立趣旨に「被災者の心のケアのために地元の宗教者、医療者、研究者が連携して行なってきた『心の相談室』の活動を踏まえて設立されたものです」（東北大学実践宗教学寄附講座ホームページ）とあるように、同室の活動の延長上にあるものだと見える。ここでは、同講座が設立された経緯や、そこで養成を目指している「臨床宗教師」の構想についてまとめてみたい。

実践宗教学寄附講座の設置

2011年に再編成された「心の相談室」は、その宗教的な中立を担保するために国立である東北大学の宗教学研究室に事務局が置かれた。そこで超宗教的に電話相談、毎月の弔い、「カフェ・デ・モンク」などの活動が進められてきたが、同研究室の鈴木岩弓教授によれば、「カフェ・デ・モンク」に参加した宗教者からは、信仰の異なる被災者とどう関わればよいかなど、宗教者としての被災者との関わり方に疑問も寄せられるようになった。そのために「超宗派超宗教的に宗教的なケアを行う際の理論的研究と実践的なスキルの検討をする必要が出てきた」（『ラジオ「カフェ・デ・モンク」心の相談室、2012年、250頁）という。また、同室発足時の室長であった故・岡部健医師も自身の在宅緩和ケアでの経験や震災後の宗教者の活動を通して、公共空間で活動できる宗教者の必要性を強く感じていた。そこで、宗教界から寄せられた寄付金を資金として、宗教・宗派をこえて現場で働く人材を養成するために開設されたのが、「実践宗教学寄附講座」である。国立大学にこうした宗教者養成を念頭にする講座が開設されるのははじめてのことである。

同講座は、学科として学生を募集はしていないが、文学部生向けに死生学やスピリチュアルケアに関連するテーマの授業を開講している。また、基礎研究とともに、宗教者向けの臨床宗教師研修プログラムを実施している。さしあたって3年間という期限が定められており、今年度がその3年目に当たる。「到来しつつある超高齢多死時代のニーズに応えるような宗教の公共的役割や、宗教協力に基づくプロジェクトが国立大学に置かれていることの意義が認められて支援が得られるならば、三年間の期限を超えて講座が継続することもあり得る」（渡邊直樹編『宗教と現代がわかる本2014』平凡社、2014年、49頁）ということである。

臨床宗教師研修

臨床宗教師とは、「チャプレン」の訳語として岡部医師が提案したもので、その育成のために同講座は、宗教者を対象に臨床宗教師研修を行っている。それが目指しているものについて、『東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター』（第1号）では次のように書かれている。

「臨床宗教師」は、公共的な役割を果たす「宗教的ケア」の専門家である。この研修は、宗教者としての全存在をかけて人々の苦悩や悲嘆に向き合い、そこから感じ取られるケア対象者の宗教性を尊重し、公共空間で実践可能な「宗

教的ケア」を学ぶことを目的とする。

「公共空間」とはおもに、被災地、病院、介護・福祉施設などを想定しており、そういった場で、各宗教・宗派の教えを説くのではなく、様々な宗教的背景を有する人を相手に、その宗教性を尊重しながら苦悩や悲嘆のケアにあたることのできる専門家を養成することを目指している。こうした点で、特定の宗教色のない国立大学に講座が設置されたのは意味あることである。具体的な研修の目標には次の4つがあげられている。

- ①「傾聴」「スピリチュアルケア」の能力向上
- ②「宗教間対話」「宗教協力」の能力向上
- ③宗教者以外の諸機関との連携方法を学ぶ
- ④適切な「宗教的ケア」の方法を学ぶ

以上の4項目について学ぶために、現在では3カ月間に3回の合宿（1泊2日）と各地での実習を行う研修プログラムが組まれている。研修の内容は、講義などの座学、グループワーク、実習の3つに大別される。2012年度は被災地における傾聴実習を行っていたが、2013年度からはそれに加えて全国の医療・福祉施設（在宅医療、ホスピス、ビハラー病棟）での実習を取り入れている。また研修期間中は互いの宗教・宗派の日常儀礼をともにやり、体験をシェアする機会ももうけられており、「日本国内の類似プログラムと比べて、異なる宗教を信仰する宗教者同士の学び合いという要素を強く打ち出していること」（『宗教と現代がわかる本2014』46頁）が特徴的で、「他の宗教・宗派の宗教者たちとの触れ合いを通じて、自らの信仰を問い直し、宗教者としての自覚が深まったという声もよく聞かれる」という（前掲書、48頁）。

研修を終えれば修了証が手渡されるが、資格の認定はしていない。「研修はあくまで終わることのない自己研鑽のひとつのスタートであり、今後の活動の広がりの中で、『臨床宗教師』という一般名称が広く浸透し、ネットワークが形成されていくことを願う」というスタンスで進められている。

活動の現状

これまで臨床宗教師研修は5回が終了し、全国からのべ76人の受講者が集まった。2013年からは、臨床宗教師研修修了者、および同様の趣旨で宗教者養成に関わる諸団体の関係者を対象に、「フォローアップ研修」が開催されている。この機会を通じて、それぞれの現場で活動している宗教者の知恵と経験をシェアしてケアの質の向上に役立てるとともに、宗教・宗派をこえたネットワーク形成を目指している。

研修の修了者が増え、関西や関東などの地域では支部が誕生して地域ネットワークの構築が進み、九州支部でも「カフェ・デ・モンク」が開店した。少数だが臨床宗教師として病院に勤務する人もはじめている（『河北新報』2014年7月16日）。

上記のように、一般名称としての「臨床宗教師」の浸透を目指すというスタンスに呼応して、龍谷大学では2014年4月から東北大学と連携しながら臨床宗教師研修をスタートさせた。来年4月からは、さらに他の関西圏の大学が研修を始めるべく準備しており、少しずつ「臨床宗教師」養成の取り組みが広がりつつあるといえるかもしれない。